Color Science Association of Japan

論　文

# 17世紀初頭ロンドンの金糸銀糸に見る色彩の消費

# Consumption of Gold and Silver Thread in Early Seventeenth Century London

日髙杏子　Kyoko Hidaka　東京芸術大学　Tokyo National University of Fine Arts and Music

Abstract

This paper will investigate the use of gold and silver in early seventeenth century textiles from the perspective of cultural history of colour. My methodology will be three fold. First, I will discuss ephemeral aspect in consumption of gold and silver by examining theatrical costumes. Second, by examining textile ornaments in parish churches, I will analyse monumental aspect. Lastly, I will review personal aspect by studying household objects.

Wearing gold and silver is an universal presentation of high status. Under Roman Catholic dominance and feudal society, the use of gold and silver had been monopolised by Catholic priests and feudal kings. Nonetheless, after the Reformation social structure in Western Europe was transformed and the consumption of gold and silver thread became more widespread. Consumption of gold and silver to exhibit magnificence and splendour was no longer limited to English royalty--the upper-middle class also began applying gold and silver thread in textiles. Consequently, there was competition among certain classes in the use of gold and silver which led to the issuance of sumptuary laws. The extent of the gold and silver thread in textiles remained in proportion to the consumer's social status. In search of philosophical impacts of English Renaissance and the Reformation, I attempt to prove this proposition through the case studies.

**要　旨**

この論文は色彩文化史の視点から、17世紀初頭の染織品に用いられた金と銀を追究する。方法論として3つの視点から考察する。まず、一時的消費を論じるために演劇のための衣裳を考察する。第二に、恒久的消費を論じるために、英国国教会の地域教会への寄贈染織装飾品を考察する。最後に、個人的消費を鑑みるために、家庭内における染織品を考察する。

金・銀の色彩を身につけることは、普遍的ともいえる高い社会地位を表現するための身体言語である。ローマ・カトリック教会の一元支配と封建社会にあっては、金糸銀糸の使用は主にカトリックの司祭と封建国王に独占されていた。しかし宗教改革後、西ヨーロッパの社会構造は変化し、金糸銀糸の消費はより拡大した。権威を表象するための金と銀の消費は、イングランドの王族のみならず、中上流階級もまた金銀を染織に用い始めた。結果的に異なる社会階層間に軋轢が起こり、それは奢侈禁止令の発令のきっかけとなった。金糸銀糸の消費量は、ゆえに消費者の社会地位に正比例していたと考えられる。 ルネサンス運動や宗教改革運動の思想的な波及を鑑みながら、ケーススタディを通じてこの消費の主題を分析する。



NII-Electronic Library Service

Color Science Association of Japan



## 1. はじめに

本論文では、17世紀初頭のロンドンにおける金糸銀糸の役割を、色彩文化史の観点から検討したい。[1] 前田、長崎、城による、色彩と文化の関連性や、染織品に使用された色彩の研究がなされている。しかし色彩文化史には、まだ学問分野として補入されるべき部分があると考えられる。その一つが、社会の動向と色彩との対応の問題である。社会史や文化史の側面から色彩を扱う意義は、表象された色彩消費の背景に潜在する、社会情勢や文化的思想と相互関係を持つ点を認識することにある。地位を表象するための金と銀の糸の消費は、宗教改革の影響下で大きく揺れ動いた。本論文の目的は、それがどのような形で促進されていたかを明らかにするところにある。16世紀後半から17世紀初頭ロンドンにおいて、イングリッシュ・ルネサンスと呼ばれた時代は、人間がより高い社会地位を表現するために、金と銀の色彩をより多用した時期だったことの論証を試みる。

色彩文化史の方法論として、消費文化における色彩表象問題の追求の有効性をまず述べる。この研究の独自性として、方法は、この消費の一時的、恒久的、個人的側面を物証的に検証する。本論文では、3つのケーススタディを通じて調査する。対象事例として、宮廷演劇の衣裳と台本、紋章をあしらった染織品、そして個人的な服飾小物をとりあげる。そして、これらの統合的な検証から結論を導く。

金・銀の色彩を身につけることは、社会地位表現の普遍的ともいえる身体言語である。しかし、さまざまなイミテーションが現れ、あらゆる人々が金糸銀糸を簡単に入手できる現代において、金糸銀糸が地位を表すための素材としての意味を失いつつある。にもかかわらず、依然として理念、イデオロギーを伝達する手段としての色彩の重要性に疑いは少ない。社会における表象を通じた色彩文化の分析を試みる一手段として、金と銀の糸の消費という側面に焦点を当てたい。

イングリッシュ・ルネサンス時代の金属糸の消費者達は、地位と自尊心を明らかにするための手段を常に求めていた。例えばニッコロ・マキャヴェッリは、『君主論』の献辞で、ロレンツォ・デ・メディチに君主の偉大さにふさわしい装身具の一つとして、金襴緞子をあげている。[2] そのような地位は、暫時的、恒久的、個人的消費によって表された。ルネサンス運動、そして宗教改革は、当時の人々の社会構造を大きく揺るがしていた。考察に入る前に、ポスト宗教改革の社会を解説する。

## 2. ポスト宗教改革の表象

宗教改革以前は、イタリアに当時のヨーロッパ社会の富が集中していた。なぜならば、ローマ・カトリック教会が教会税として、ヨーロッパ中から資金を徴収していたのである。しかし16世紀の始め以降、国王を首長とするイギリス国教会の設立は、ロンドンの経済発展と人口増加を引き起こした。[3] この人口増加は複雑な社会構成を生み出してしまった。

中世においては、戦うもの（騎士）、祈るもの（聖職者）、そして第三身分の働くもの（労働者）の3つの階級だけが存在した。しかしイングランドが経済発展していくにつれ、ジェントリ階級[4]が新しく生まれた。彼らは代々受け継いだ家柄や領土は持たなかったが、代わりに経済的実権を握っていた。このジェントリ階級の隆盛と社会の拡大は、新たな地位闘争を生み出した。服飾や装飾品の消費の規制によって、社会地位を明確に区別し、確立させるために、国王は奢侈禁止令を多く発令した。[5]

ゴシック時代より、眩いほどの典礼用品を装飾した刺繍は、イングランドの主な輸出産業であった。[6] ローマ・カトリック教会は、イングランドの刺繍職人ギルドの最大のパトロンであった。ギルドは宗教的染織品のための国内外のカトリック教会からの用命に依存していた。それらの教会のパトロネージなしでは、刺繍職人は仕事を失う結果になるので、彼らは生きるためにコンスタントな用命は必要だった。宗教改革後、個人の栄光の表現が、聖人像に対する造詣よりも視覚的により重要になってきた果てに、代わりの消費パターンを生み出した。染織職人達は金属糸を、世俗用の染織品として、刺繍にレースに織物に贅沢に使った。宮廷演劇も紋章付き染織品[7]も、教会や聖人への造詣よりも消費者自身の自尊心を表象したポスト宗教改革

[1] 日髙杏子: 色彩の消費 —— 17世紀初頭ロンドンにおける金糸銀糸による地位表象 —— 、日本色彩学会誌、volume 23 supplement、日本色彩学会（1999）78-79　本論文は、第30回日本色彩学会全国大会における口頭発表に基いている。

[2] マキャヴェッリ：河島英昭訳『君主論』岩波書店 (1998) 9

[3] R. Finlay：Population and Metropolis: the Demography of London, 1580-1650 (1981) Table 3.1.

[4] ジェントリとは、中上流階級、または富裕な商人などである。

[5] Hunt, Alan：Governance of the Consuming Passions —— a History of Sumptuary Law, London: Macmillan（1996）29
日髙杏子: 日本色彩学会（1999）78-79
「イングランドにおける奢侈禁止令の回数」
13世紀 —— 0回、14世紀 —— 5回、15世紀 —— 4回、
16世紀 —— 20回、17世紀 —— 1回



NII-Electronic Library Service

Color Science Association of Japan



のたまものであった。

### 2．1．国際的表象と国内的表象

ポスト宗教改革のヨーロッパでは、国家間での競争がより激しくなっていった。それまでのローマ・カトリック中心、イタリアを不動の核として動いていたヨーロッパの立場が変わった。それは例えばルター（1483-1546）の聖書のドイツ語訳に象徴されることだが、それぞれの国の独自性をより尊重する社会変化が拡大をみせた。イングランドにとって、イギリス国教会の設立は、宗教および文化のイタリア集中からの脱出のみならず、 経済的依存からの自立であり、旧体制の解体であった。16世紀のおわりには、イングランドの経済と軍事力は他のヨーロッパ諸国と同程度まで拡大した。[8] そしてイングランドは世界的な場で、重要な役割を得ていくにつれ、国際的地位を維持する必要も増え、他の大陸諸国に対して様々なプロパガンダを行った。

一方、国内では、ジェントリ階級の隆盛、人口増加、そして貿易の発展がより一層激しい地位闘争への環境をつくっていった。ジェントルマンとしての教育、土地購入、そしてよしとされる趣味に応じた立派な邸宅を建てるのが地位の表象であった。

### 3．金と銀の糸の一時的と恒久的消費

第一に、宮廷演劇の国際的意義について考察する。これらは一時的イベントであり、物的証拠が多く残ってはいないが、その重要性は広く知られている。例えば暫時、一時的な消費とは、美食、演劇鑑賞、化粧、香水など、永続性はないけれども、裕福さと洗練の目安であり、記録は文献と絵画においてのみ存在する。このような種類の消費を調査するためには、レシピ、日記、手紙、設計図、台帳などの記述的な資料に依存しなくてはならない。

第二に、紋章付き染織品の国内での影響を調査する。例えば邸宅、教会、絵画、宝飾品、本、キュリオなど、現存する物的記録を通じた恒久的な誇示消費の証拠は、追跡がより容易であるといえる。

第三に、服飾小物について検討する。個人的消費に関しては、一時的要素は少ないが、日常使用していた消耗品が多く、残存する可能性は比較的低い。そのため、肖像画や風俗画などの資料に依存する面が多い。

それぞれのケーススタディはどのように威厳と栄光を期待する効果を得るために金糸銀糸が使われたかを考慮する。

### 3．1．一時的消費

第一に国外に対する地位表象として、一時的な宮廷演劇の衣裳におけるその色彩の消費を概観したい。17世紀前半ロンドンにおける宮廷演劇衣裳は、対外的にどのように威圧したのか。

エリザベス一世（1558-1603）からジェームス一世（1603-1625）時代の文化において、演劇は社会を映す鏡のような役割を持っていた。かつ宮廷にあっては、宮廷の催し物として、パレード、花火のようなスペクタクルなどの一環として王室の広報的役割もあった。ここでは、ジェームス一世朝文化における宮廷演劇の衣裳の役割と影響を、3つの側面を通じて追究してみたい。ジェームス一世の寵臣であり、初期の宮廷演劇における代表的人物であったルーシー・ハリントンとそのルーシーに捧げられた台本に焦点を当てる。

しかしそれらの分析に入る前に、宮廷演劇の定義、および当時の美意識と理念の語義を述べる。

ジェームス一世朝は、イングリッシュマニエリズムと呼ばれる、イングリッシュ・ルネサンス文化の絶頂期であった。ルネサンスとその伝統に立つ演劇は、ギリシャ・ローマ演劇のリバイバルともとれる。経済的に裕福な階級から、少なくとも2-3シリングまでなら入場料を払える底辺層にいたるまで、全ての階級の人々が演劇文化を享受できた。そのような一般大衆演劇に対し、王室と貴族が中心になって行っていた宮廷演劇があった。宮廷演劇はマスクと呼ばれ、宗教改革後の国際社会での文化的な外交手段として、各国の大使達へイングランド王国の偉大さを力強く訴え、彼らを通じてイングランドの至上性は宣伝された。マスクの定義として、マスク文学の研究者ジャージー・リモンのそれが最も正鵠を得ていると思われる。マスクは

[6] ゴシック時代から、ラテン語でOpus Anglicanum（イングランドの作品）と呼ばれていた。

[7] 森　護：英国紋章物語、河出書房新社（1996）155-170
紋章授与には、出身地、家系、地位身分、功績、婚姻関係が審査対象であった。紋章を所持できるということはこれらの基準を社会的に満たしたものであるという証明であった。文豪ウィリアム・シェイクスピアの父ジョンが、ジェントリ（郷士・中上流）階級の証として紋章を申請した。喜劇「ウィンザーの陽気な女房たち」では、郷士(armigero)が紋章所持者(arm-holder)の意味でも使われている。

[8] 1588年には、スペインの無敵艦隊をイングランド海軍が撃退した。
1600年には、東インド株式会社が設立され、植民地貿易の主導権を把握した。

[9] Limon, Jerzy: The Masque of Stuart Culture, University of Delaware Press (1990)



NII-Electronic Library Service

Color Science Association of Japan



演劇主体で16世紀後半に始まり、ジェームス一世朝、チャールズ一世朝に発展したと彼は形容している。[9] そこで用いられた衣裳は、国家の威信と美徳を示唆する視覚的目安として見られ、そのために莫大な費用と労力がつぎ込まれた。しかしその暫時性、および宮廷の閉鎖性ゆえに、マスクのその正しい姿がどのようになっていたかを把握し、形容するのは難しい。

この時代には、自己の威厳を表現する重要性について、様々な議論が交わされた。地位ある者は、その地位にふさわしく表象されるべきである、という新プラトン主義的正当化がなされた。英語でmagnificence and splendourそして、pomp and circumstanceといういずれも誇示を表す言葉を考えてみたい。

アリストテレス（BC 384-322）の道徳律にmagnificenceとは、よい趣味を共にした消費、という意味があり、公的な場における行動を示す。そして、splendourは元のラテン語ではsplendere輝くという意味であり、この両者の結合は慣用句である。そして、このpomp and circumstanceという言葉は、シェイクスピア（1564-1616）の「オセロ」にあり、 輝かしい戦いの盛儀盛宴（オセロ3 iii 354） pomp and circumstance of glorious warから由来する。そして、これは、華美な行列やページェントを意味する言葉でもあり、マスクの壮麗さを描写するのにふさわしいキィワードである。

**図1　マスクの衣裳を着たルーシー・ハリントン、ベッドフォード女伯爵**
**1604-6年頃　油彩・キャンバス**
**213.4cm×129.5cm　ベッドフォード地所 所蔵**

ジェームス一世の妃アン・オブ・デンマークの親友であったベッドフォード女伯爵ルーシー・ハリントン（？～1627）は、マスクの代表的スターであるとともに、当時の宮廷における流行の先端を行く存在として君臨していた。マスク「十二女神の幻想」の著者であるサミュエル・ダニエルは、この台本をルーシー・ハリントンへ捧げた。ギリシャ・ローマ神話に基づく役柄に、様々なイングランドの美徳を象徴させた。14世紀以降、図像的に否定されていたローマ神話モチーフを公然と美術や文学の上で扱うことが復興した。[10] そしてこれらの神々を図像として扱うことに対するさまざまな議論がなされ、キリスト教的に正当化しようという試みがなされた。[11] しかし、17世紀にもなると、議論されるというよりも、ギリシャ・ローマの古典様式を取り入れること自体が一つの様式としてマニエリズム化していった。[12]

マスク「十二女神の幻想」は1604年1月8日の日曜、ロンドンの南の郊外にあるハンプトン・コート宮殿において、王室主催でジェームス一世即位最初の新年を祝うために上演された。[13] その序論でサミュエル・ダニエルは、衣裳に金と銀の糸を用いた刺繍を、役柄に応じて細かく指示した。図1において、ルーシー・ハリントンの衣裳は、全身金糸で装飾され、その身分と経済状態を語っている。そして頭の羽、王冠、紗によって、女神の威厳を顕示している。

視覚は、新プラトン主義における序列にあって、本質的なものとして重要視されていた。[14] そこで視覚によって抽象概念である知恵・美徳を理解させるエンブレムや寓意画は、彼らの表現にとって不可欠なものになった。さらに中世から、色彩、数字や動植物に与えられていたアトリビュートや紋章学の伝統との結合が

[10] Panofsky, Erwin: Renaissance and Renascences in Western Art, "Renaissance" —— Self-Definition or Self-Deception?, Harper & Row, Publishers（1969）5-8
美術史学者パノフスキーによれば、オックスフォード辞書の定義を引用して、ルネサンス自体の定義を試みている。
[11] Ibid.
[12] Ibid.



NII-Electronic Library Service

Color Science Association of Japan



なされた。[15] 国家の栄光を、視覚によって訴え、かつその意味を読み取ること[16]は、新プラトン主義にのっとったルネサンス人の表現手段であった。

他のものに較べ、金・銀、特に金は高価で価値があった。金と銀の糸は、金または銀の延べ板から、ダイスと呼ばれた型を太いものから細いものへと、いくつも順に通して細く延ばした金属線をつくり、それを絹糸芯に巻き付けてつくられた。この糸の製法はヨーロッパ大陸から16世紀にイングランドに伝わったもので、イングランドではミラノ・ボローニャと呼ばれた。日本では一般的にモール糸と呼ばれている。貴金属の純度が高い場合、古くなった生地を燃やしても貴金属部分が残り、古い衣裳はまた他の服飾小物へと再利用ができた。つまりこの製法による糸は、リサイクル可能で資産価値があった。かつ、このようにつくられた糸は東洋における紙に漆をぬって金箔をはりつけてできた糸などに較べ、立体的に全ての角度からの光を反射し、遥かにどこから見てもよりぴかぴかと光輝き、陰影をも作り出す特質がある。太い糸でつる模様や花の文様のレリーフを作り出すかのようにかなり彫刻的に金銀糸で刺繍を施す技法によって一層重厚な立体効果をあげた。

それにともない、衣裳の重量はかなりのものであったと想像される。ただでさえこの時代の染織職人達はマスクの衣裳に金糸銀糸を贅沢に使った。それまで一級国と呼ばれたイタリア、スペイン、フランス、フランドルに対して、新興国イングランドの国威を誇示するために、まばゆくきらめく金糸銀糸の量の面でも、各国の大使を圧倒した。マスクの衣裳はそのために重要な役割を果たしていた。例えば、1617年のトーマス・カンピオンのマスク、The Lord Hay's Masqueでは、1500ポンドもかかったとの噂が記録にある。このマスクのために使用したものは、232ポンド51/4オンス1ドラム（トロイ）の豪奢な金と銀のスパンコール付きレース、204ヤードの銅のもの、318ヤードの金と銀の織物、そして294オンス（トロイ）の銅レースなどであり、804スコアヤードが8つの衣裳のために8頁にわたって記載された。[17] すなわち当時の上流階級の人間が国家あげてのページェントにすさまじい重さの衣裳をつけて演じていた。シェイクスピアの「空騒ぎ」にも、地位を示すその時代の記号として、およびその物質的重量の示唆として、金と銀の染織が表現されている。[18]

### 3．2．恒久的消費

第二に、国内での恒久的に残すための消費の例として、教会への寄進物があげられる。中世の間ずっと、ヨーロッパ社会は王以下、公爵、伯爵、子爵、男爵、准男爵、騎士、盾持ち、ジェントルマン、職業人、商人、職人、百姓まで社会地位が歴然としていた。封建社会では、これらの区別は土地保有によって形成された。国王は領地内の経済的権力は持っていたが、宗教的権力は持っていなかった。先に述べたように、イングリッシュ宗教改革の一つの結果は、国王が教会の首長になったことである。これにより、国王の主権が政治的支配のみでなく、宗教的権力も得たということである。これを強化するために、ジェームス一世は1611年に、聖書学者にいわゆるジェームス王版と呼ばれる欽定訳聖書の刊行を命じた。彼は王権神授説を公布し、この権力に聖書の正統性を唱えた。[19]

このような王権神授説に基いて国王は、その立場をより効果的にするために人々を裁き、任命し、区別することができた。その帰結として、社会地位とその表象は非常に複雑になっていった。全ての人々は彼らのステータスにふさわしい生活を余儀なくされ、ゆえにステータスの定義と誇示はますます重要さを増した。

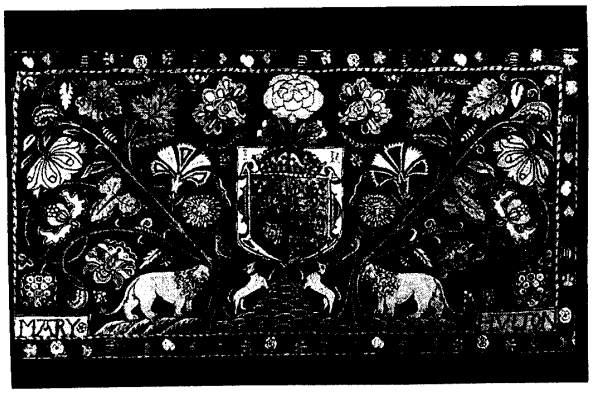



**図2　ジェームス一世の紋章が刺繍されたクッション**
**1603-1625年頃**
**ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館 所蔵**

[13] DANIEL, Samuel: LAW, Ernest, edited by, The Vision of the Twelve Goddesses, a Royall Masque, presented in 1604, Bernard Quaritch (1880)
[14] ロイ・ストロング：ルネサンスの祝祭　王権と芸術　上、星和彦　訳、(1987) 55
[15] Ibid.
[16] 小町谷朝生：視覚の文化、勁草書房、(1990) 26
[17] William Larkin and the 3rd Earl of Dorset, a Portrait in Focus, English Heritage (1989)
[18] シェイクスピア：福田恆存訳「空騒ぎ」新潮文庫 225-226
マーガレット「今度のお髪はとてもおよろしい、これでもし鳶色が勝っていましたら、もっとお似合いかもしれませんけれど、それに、お召物にしましても、さすがに型が斬新で。私、ミラノの公爵夫人のお衣裳を拝見した事がございます、皆さん、お褒めになりますけれど ―― 」



NII-Electronic Library Service

Color Science Association of Japan



エリザベス一世朝の奢侈禁止令によれば、伯爵、女伯爵、ガーター騎士以上のランクの者のみが金銀の布と貝紫色の絹は着用できた。[20] そして、男爵、ガーター騎士、枢密顧問官以上のランクの者のみが金と銀を織り込んだサテン、金と銀の刺繍、もしくは外国製の毛織物を着ることができた。[21] 奢侈禁止令によって、極度に少人数のみが金と銀を使用した繊維を身につけることが許されていた。そのような繊維を購入できたはずの裕福な人々は、もっと多くいたはずだが、政府は彼らには消費を許さなかった。このように、裕福さの視覚的基準は形成され、社会において人々を見分けるはっきりした区別がなされた。エリザベス一世の後継者として、ジェームス一世は全ての民がそのような「らしさ」に従う生活を望んだ。国教会教区は地域社会版集権王国であり、社会地位の展示場であった。日曜日の教会ではジェントリ、商人、職人、百姓といった異なる社会地位の住民が、一カ所に礼拝しに集まった。彼らの衣裳のみが社会地位を示したのではなく、彼らの寄贈した教会の染織品も、地位を定義し表現していた。

**図3　男性用ナイトキャップ**
**17世紀前半頃**
**ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館 所蔵**

美術史家C. バントはこの時期をエンブレムの時代であると述べた。[22] 中世の戦闘用盾に描かれた絵から発生した紋章は、最も集約された形態でのエンブレム的表象だった。ルネサンス以降紋章的シンボルは、大学、商人、職人ギルドを表象するために使われ、結果的には元の戦闘のための役割を果たさなくなった。しかし紋章の所持と表現は、格好の社会地位のシンボルになった。社会ヒエラルキーがより複雑になり、紋章保持者が増えるにつれ、紋章学の種類と決まりはより一層ややこしくなった。サポーター、モットー、クレスト、ヘルメットなどが紋章を装飾するための主な方法であり、色彩による細かな法則が成立していった。必然的に、金・銀を紋章に多用するのは高貴の徴であった。

ここで特に一種の装飾美術を例にする。国教会の教区内教会では、ジェントリは一家の重要性と地位を、紋章で飾られた予約席の存在で示した。この地位の顕示は教会環境の私有化の始まりだった。C. バントは、エリザベス一世朝イングランド以降、多くの宗教用刺繍染織品の生産が、個人の俗用品へと変化したと述べた。[23] 結果的には個人の家庭用刺繍品の量が増えたのである。紋章を刺繍したクッション、聖書カバーなどが生産された。これらはその地域の権力者階級（ジェントリ）が、国教会地域教区における近隣社会に、個人の権威を表現したものと考えられている。国王は国教会のその建物が飾られるのを容認してはいたが、行き過ぎを監視するのも怠らなかった。1618年には、ジェームス一世は、金塊の無駄な浪費を防ぐために金・銀箔の使いすぎを禁止した。

「そしてこの王国における、不必要で過剰な金と銀の箔は防ぐべきである。このような金・銀箔の鋳かけや使用を、建物、天井、腰板、寝台、椅子、足掛け、馬車、もしくは他のどのような装飾にも、国王陛下の命により固く禁ずる。」[24]

そのような消費は、金塊の保存に対する障害になる

ヒーロー「ああ、類のない程だとか、評判ね。」
マーガレット「それが、本当の話、お嬢様のに較べましたら、まあ、夜着みたいなものでございますよ —— 金糸の生地には飾りの切込みがあり、下袖、傍袖から裾にかけて銀糸の縁取りに真珠をちりばめ、それを引き立てるように群青の縞模様を這わせてあるのです —— でもこの型の上品で粋で、とてもすてきな事といったら、その点、お嬢様の方が十層倍も御立派でいらっしゃいますよ。」

ヒーロー「どうぞこれが着られますように、着ないうちから、心が重くて仕方がないのだけれど。」

19 「人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。したがって、権威に逆らっている人は、神の定めにそむいているのです。そむいた人は自分の身にさばきを招きます。」ローマ人への手紙　13章1-2節　新改訳聖書



NII-Electronic Library Service

Color Science Association of Japan



と国王は推測していた。しかし、彼は金と銀の箔をいくつかの恒久保存用、かつ軍隊的消費を例外として容認した。

「鎧、武器、または武器と勝利の印、葬儀、死者のための建造物を除く」[25]

王室や貴族は、示威のための行進や馬上武術試合、そして戦争準備のために、豪華な甲冑や武器を用いた。多くの金糸銀糸が染織の形態でも表現するために使われた。金糸銀糸の消費量は、ゆえに消費者の社会地位に正比例していた。

教区教会で地位の象徴を公に色彩で誇示するのは、エリート階級にとって最も永続性のある手段だった。そして、宮廷演劇や他の一時的なイベントに較べると、この形の消費は多くの物的証拠を残した。

ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館は、この時代の紋章をつけた跪き用クッションをいくつか所蔵している。図2の王室の紋章がある長方形クッションカバーは、これはジェームス一世朝の刺繍に関する多くの特徴を示している。全てのモチーフは麻キャンバス地にテントステッチで刺繍されている。「メアリー・ハルトン」の記名は恐らく刺繍家自身を示すと思われる。巨大な薔薇を上に、犬、鳩、ライオン、カタツムリ、這う虫、さまざまな抽象化された花々、葡萄などは、すべて特徴的なジェームス一世時代の刺繍モチーフである。金糸は確かに大量に使用されているのだが、ここで顕著なのは、すべて輪郭を描き、ハイライトを入れるために用いられていることである。ゴシック時代のひたすら金糸銀糸で埋めつくすような刺繍とは異なり、より強調する部分に効果的に刺繍が施されている。ジェームス一世時代の金糸の使用はある意味で制御されており、王室の紋章を際立たせる強い効果を狙っている。特に意味深いように、国王のイニシャルであるIR(Iacob Rex)は金糸で刺繍されている。[26]

### 3．3．個人的消費

第三に、消費者が個人的に使用したという点がある。ルネサンス時代以降の伝統にのっとり、特権階級の寝室は個人的密室というより、家のなかで最も金額をかけて装飾した場所であった。そして王侯貴族の目覚めの儀式があり、図3に見るようなナイトキャップのような個人所持品の細部にさえ、金と銀の糸やスパンコールを多用した作品が現存する。室内で用いる個人的なナイトキャップというところに、特に興味深い金糸銀糸の活用である。上質の麻でできており、その抽象的な植物モチーフを刺繍した物である。主に緑の絹糸で縫われていて、しかし小さな金のスパンコールで枝や花弁を縁取っている。この効果はまばゆいものだが、しかし、金と銀の糸は核心になるモチーフと輪郭線だけで、全てを金で覆いつくすものではない。生活の隅々まで光り輝くために、金と銀の色彩の優越性を配置して、頻繁に身につける微細な物品にも配慮がいき届いていた。[27]

### 4．検証

以上のように金糸銀糸に彩られた様々な形態の染織品が、17世紀前後に制作されて使われた。他のものに較べ、金・銀は高価で、装飾美術における金と銀の存在自体が社会経済地位のメッセージを伝達していた。まず、マスクの衣裳を通じて、国家の経済状態を海外の大使に見せつけた。また、個人の紋章を教会の場に置くことにより、地域に経済状態を誇示した。そして装飾小物の、細かなところにいたるまでの着用により、経済状態を家族や家来、そしてなによりも自分自身に知らしめた。

ルネサンスの個人主義、新プラトン主義、そして、宗教改革後のイングランドにおける絶対王政、これら全てが相乗効果をあげて金糸銀糸の消費に拍車をかけた。ルネサンス運動に大きな思想的影響を及ぼした新プラトン主義者プロティヌスは、色彩の形態におけるイデアの本質として、火を例に出している。火は、そのもの自体が光り輝き、色彩を内包している。[28] 視覚的な美において、光をイデアとする新プラトン主義の理想が火に象徴されている。そのように、光り輝く本質となることを目指す者が富貴とされていた。金属色の卓越性は、相対的に他の色彩よりも超越感を形容するのに適していた。光への憧憬を具現化させるものが、金属糸であった。さらに、金・銀が価格が高く、消費できる人口が限られていた時代には、それらを消費可

[20] Alan HUNT：Governance of the Consuming Passions: a History of Sumptuary Law, Macmillan（1996）
[21] Ibid.
[22] Cyril G. E. Bunt：Tudor & Stuart Fabrics, F. Lewis Publishers, Ltd.（1961）
[23] Ibid.
[24] The King：A proclamation prohibiting the exchange of Moneys for profit, the making of Plate of any his Maiesties Coynes, and the excessiue vse fo Gold and Siluer Foliate, London: Bonham and Norton and Iohn Bill（1618）
[25] Ibid.
[26] Kyoko HIDAKA：Gold and Silver Thread in Jacobean London 1603-1625, Master's Thesis, Royal College of Art（1998）
[27] Ibid.



NII-Electronic Library Service

Color Science Association of Japan

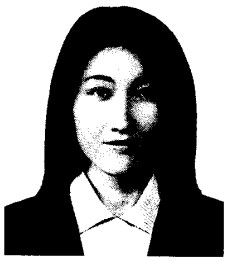


能であること自体が地位だったのである。

## 5. おわりに

一時的、恒久的、そして個人的に、生活全体を金・銀の色彩で統一していたのが、ルネサンスの貴族達であった。宗教改革以降、北方の国々がイタリアの金銀装飾で覆われた文化に憧れ、模倣した時代に、金と銀の色彩は権威の象徴であった。色彩で自分の属する地位を表すために、金糸銀糸は最適な素材であった。ルネサンス運動および宗教改革は、個人の栄光の表現を強力に後押しした。社会における個人の優越性を表象するために、金糸銀糸は理想的な身体表現媒体であった。ジェームス一世朝のエリート達は、宮廷演劇のなかに使われた金糸銀糸という媒体を通して国家の威信を象徴していた。また、権威を強調するために、奢侈禁止令を通じて一部特権階級を視覚的に判断できるように社会を構築していった。ゆえに、この時代に支配者層に消費された金属糸の量は膨大なものとなった。

（受付日：1999年8月5日）



日髙（ひだか） 杏子（きょうこ）
1970年6月1日生
1998年　英国　Royal College of Art　修士課程修了
ルネサンス装飾美術史専攻
現在　東京芸術大学大学院
博士後期課程在学中　色彩学専攻
日本色彩学会、服飾美学会、英米文化学会、
美術教育研究会　各会員
美術修士

[28] Albert Hofstadter and Richard Kuhns, Edited by：Philosophies of Art & Beauty, The University of Chicago Press（1976） 144



NII-Electronic Library Service